

ちょっと一息ついて思うこと

北村 八重子

前・医療法人生長会ベルランド看護助産専門学校助産学科教員

勤務経験が私に与えてくれたもの

思い起こせば卒業後、臨床で助産婦を6年経験し、その後教育に携わって6年と、実際過ぎてみれば短い12年間だったと思います。この間には数えきれないくらいの人との出会い、そして時には別れもありましたが、今こうしていられるのもその方々のお蔭だと、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、13年目のこの春、結婚して第二の人生を歩み始めることができたのも、これまでの営みが与えてくれたものと思っています。今まで慣れ親しんでいた環境を離れ、「主婦業」という全く未知の世界に入り込むのには迷いがありませんでした。それはきっと、この12年の間に培ってきたものがそうさせたのかもしれない。

私たち助産婦の働く現場の空気は常にピンと張り詰めています。そんな中で、否応なく仕事の厳しさというものをたたき込まれてきたように思います。それが、何があってもくじけないだけの勇気を与えてくれています。

一方、今の生活はまだ始まって4か月しか経っていないので言えることかもしれませんが、厳しさもなく、まるで無重力空間の中にでもいるかのようです。これから先どんな困難が待ち受けているかもしれませんが、臨床の現場でいろいろな家族の肖像を見てきた中で、自分なりの家族のあり方を作り上げることができそうです。それが今後の私の道しるべになってくれることと思います。

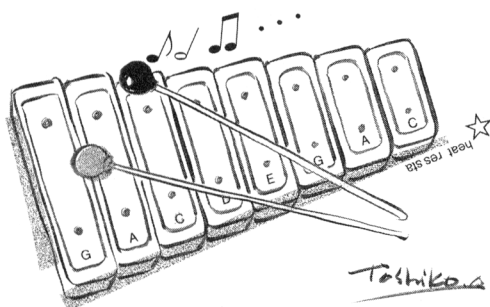
私は結婚という幸せをつかむのは少し遅くなりました。ですから周りを見ると私くらいの年齢の

方だとすでに上は小学生、下は保育所に通う子供さんをお持ちの方がほとんどです。私が助産婦という仕事を経験していなければ、もしかするとこのようなお母さん方の中に入っていくのは容易なことではなかったかもしれません。助産婦として培ってきた知識があったからこそ、お母さん方との会話の中にも入っていくことができたようです。そして、一度会話が始めれば無意識のうちに助産婦魂を発揮しているのか、自ずと助産婦と察知されてしまいます。最後には、「これから心強いわ。また、何かあったらよろしくね」などと言われると、助産婦冥利に尽きます。

また、近所の子供にも自然に接することができ、むしろ、沸き上がる感情を抑えなければいけないくらいです。そして子供たちもすぐになついてくれます。その子供たちになつかれることで、周囲の大人たちからもより早く信頼感を得ることができるようになります。

家庭に入って得られたもの

結婚後、家庭に入り「主婦業」に専念していくうちに、今では近所の母親たちと、同じ主婦という立場で率直に話し合えることもわかってきました。今までの12年間の間にこのことがわかっていればこんなアドバイスもできたのにと、悔やまれることも度々あります。こうした会話ができるのも、家庭に入って時間的なゆとりができたからではないかと思っています。常に何かに追われているような生活を送っていたら、お誘いの声もかからないでしょう。



誘う側の気遣いも改めて知ることができました。「今日は駐車場に車があるからご主人がいらっしゃるに違いない。だから誘わないでおこう」「洗濯物が干してないから体調が悪いだろう。また、今度の機会にしよう」等々、誘うべきかどうかあれこれと細心の注意を払って下さっていることがわかりました。以前の私ならこれだけされたらずっと監視されているみたいで嫌に思ったかもしれませんが、今ならそれだけ気遣ってくれる隣人にますます信頼感を寄せてしまいます。そして、そうした隣人からお声がかかれば、時間も忘れて話し込んでしまいます。“遠くの親類より近くの他人”とはよく言ったもので、何より隣人に恵まれることが生活の安定につながるように思います。

また、精神的なゆとりもさらに深みを増したように思います。一人暮らしが長かった分、家庭の温もりがこの上なく心地良く感じられます。真っ暗で灯も灯っていない家に入る時ほど淋しく感じることはないように思います。灯が灯っているだけでも温もりが感じられます。私はこの“家庭の温もり”を求めて、退職を即決したのも確かです。そして、何の迷いもなく、今の世界に飛び込んでいくことができたと思います。そして、この家庭の温もりを守っていくことが、私のほんのささやかな結婚に対する責任のように考えています。夫も結婚に対するこうした考えには共感してくれています。これからはこの温もりに加えて家族の愛を育んでいきたいと思っています。

今までの12年間は気ままに生きてきました。

そして幸い友人にも恵まれて過ごしてきました。しかし、そんな生活に終止符を打ち結婚し、1人から2人で生きていくことになって初めて、1人で生きることのしんどさを実感しました。確かに2人でいることの煩わしさもありますが、何か言えば、それに答えてくれる人の存在は自分の存在を確認できます。自分の存在を誰かに確認されているということは非常に大切なことで、仮に死というものを考えたとしても踏みとどまらせる、と聞いたことがあります。そして今では、2人で生きていくことがどんなに楽なことなのかも感じるできるようになってきました。

これから私にできること

今まで慣れ親しんできた世界を出て、また新たな世界の中に飛び込んでいくには、多少なりともエネルギーが必要になると思います。しかし、私の場合はそのエネルギーもほとんど使うことはありませんでした。それは今までの12年間で培ってきたものが補ってくれたからです。知らず知らずのうちに蓄積された看護婦、助産婦としての知識が、こんなにも私を支えてくれているとは思ってもありませんでした。改めて、看護婦、助産婦を志したことに悔いはなかったと思います。

長い人生、これから先、再び助産婦として現場で働く機会を得るかどうかは分かりませんが、今は助産婦としての知識を間接的に地域の人に伝えていって、少しでも役に立てればと思っています。

次回は、宮崎で臨床看護に携っておられる西畑久美子さんにバトンを渡します。